

命題態度について

金 井 満

0. はじめに

『ドイツ学研究』第39号の「発話行為と行為」において、発話行為理論の枠内で扱われる行為とは何かということを考察しようと試みた。その際主にデヴィットソン (Donald Davidson) の『行為と出来事 (Essays on Actions and Events)』¹⁾を参考にし、彼が行為を出来事と見なし、出来事であるためには特定の仕方での記述可能でなければならないと述べていることに基づいて、彼の行為論の中でも特に行為文の論理形式を中心的に扱ってみた。

デヴィットソンは、意味論と行為論の分野において主要な業績をあげているわけであるが、行為論における主な業績としては、行為の因果論や心身の非法律論的一元論の提唱が挙げられるであろう。行為文の論理形式の分析と出来事の存在論は、彼の行為論における上記した2つの関心事と密接に関連している。行為文の記述というのは、本来は行為の因果論を論じる一環として考察されている。デヴィットソンは、行為の目的論的説明は因果的結合に依存せざるを得ないと考える。さらにある理由というものが、行為者が実際に行為したその行為の理由となるためには、命題態度 (propositionale Einstellung) と行為記述との間に、その態度が行為の理由となるために必要な関係が存在しなければならないと述べている。ある行為文が与えられるということは、その行為がどのような意図を持って行われたかを説明することであるという観点から、行為文の論理形式が検討されている。ここにおいて重要な点は、行為文の論理形式は命題態度という行為者の行為の意図との結びつきにおいて考察されている点である。前出の論文においては、単に行為とは何かを考察する意味で行為文の論理形式を扱っただけにとどまってしまったので、今回は命題態度というキー

ワードを扱ってみたいと思う。まずはじめに発話行為論の枠内ではどのような扱いがなされているかを見てみたい。

1. 発話行為論における命題態度

命題態度あるいは命題的態度という用語は、そもそもラッセル (B. Russell)²⁾ が「信じる」、「知る」、「欲求する」などの動詞で表される心的態度を、従属節で表される命題に対する態度であると見なして命名したものである。この命題態度が問題となるのは、心身問題、いわゆる de rei (ものについて) と de dicto (語りについて)³⁾ の問題や、行為論の枠内においては行為と信念、知識、欲求などとの関連は切っても切り離せない関係にあるということである。さらには意味論において命題態度を表す文の取り扱いが大変困難であるというような問題が指摘されている。このような命題態度は発話行為論の中ではどのように扱われているのかをまずは述べてみたい。

発話行為論 (Sprechakttheorie) の創始者であるオースティン (J. L. Austin)⁴⁾ は、主著『言語と行為 (How to Do Things with Words)』⁵⁾ においては、命題態度に関しては特別に述べていない。またサール (J. R. Searle)⁶⁾ も『言語行為 (Speech Acts)』⁷⁾ の中では個別に考察していないが、『志向性 (Intentionality)』⁸⁾ において詳細に扱われているので後に詳述したいと思う。

ここではヴンダリッヒ (Dieter Wunderlich) が „Studien zur Sprechakttheorie“⁹⁾ と „Aspekte einer Theorie der Sprechhandlungen“¹⁰⁾ の中でそれぞれ命題態度について言及している部分を取り上げてみることにする。

1.1. ヴンダリッヒにおける命題態度

ヴンダリッヒは „Studien zur Sprechakttheorie“ においては命題態度を「言語行為に関わる者は、命題内容に対してある特定のポジションをとることができる。あるポジションタイプ E は、その作用領域が命題内容の適合する集合とその値域が命題態度の集合である関数の演算子として見ることができる。個々の命題態度は、話者と受け手に関係づけられる。」¹¹⁾ とし、

X の命題態度 = E(p) (X)

のように表している。このポジションというのは、様々な種類の関数定数によって表現されるとして以下の 9 項目の関数定数を挙げている

- epistemische Funktoren (認識的関数定数): wissen, denken, zweifeln, es könnte sein
- doxastische Funktoren (教義的関数定数): glauben, überzeugt sein, unterstellen
- normative Funktoren (規範的関数定数): müssen, sollen
- motivationale Funktoren (動機的関数定数): wünschen, möchten
- intentionale Funktoren (志向的関数定数): wollen, beabsichtigen werden
- präferentielle Funktoren (優先的関数定数): vorziehen, für besser finden
- evaluative Funktoren (評価的関数定数): schlecht finden,
- expectative Funktoren (予測的関数定数): erwarten, annehmen, hoffen, befürchten
- parative Funktoren (準備的関数定数): können, bereit sein¹²⁾

上記のような関数定数以外に、心態詞や文アクセント、さらに希求法のような文法上の法によってもポジションは表現されうると述べられている。ここにおいて重要なのは意味論という限定された枠内では命題態度とは何かが明確にはならず、實用論の枠内では命題態度を特定の発話行為のタイプと関係づけることが可能であろうという指摘にあるように思われる。

„Aspekte einer Theorie der Sprechhandlungen“ では、冒頭で示した『発話行為と行為』においても簡単にヴンダリッヒの言語行為について言及しておいたが、発話行為と発話のタイプを決定する要因にはどのようなものがあるのかという観点との関わりにおいて命題態度が扱われている。

ヴンダリッヒは、発話行為と発話のタイプというのは

1. 法、明確な行為遂行文、特定の位置に配される指標となる *bitte, mal, ja, namlich* のような語、語りかけ文やイントネーションのような慣習的方法
 2. ある制度に特有な期待と行為に対する義務や個人に固有のコミュニケーション状況の予測のようなある制限された文脈において
- という 2 点で決定される。しかしながら

„Ich komme morgen.“

„Ich verspreche dir, dass ich morgen komme.“

という 2 文をみた場合に、1 の観点からでは約束行為とみなされるのは後者のみであるという点から 2 の観点を中心に論文を展開している。その際「すべての発話行為の検討においては話者の命題態度が重要な役割を演じる。話者は特定の命題態度を表明し、聞き手が同様のあるいはそれに対応するような命題態度をとるように意図する。」¹³⁾ と述べられている。ここでヴンダリッヒは、態度の対象となるのは文ではなくあくまでも命題であることを指摘する。命題とは、通常 *class-* 文や名詞化された形で表される場合が多く、時間に依存しない対象であり、文の内包とは同一のものではないとされる。さらにこの言行為理論に重要な命題概念を規定するためにシュタルナッカー (R. C. Stalnaker) による命題の分類を導入し、命題態度の対象が命題であることを明確にしている。また話し手と聞き手の命題態度には言語行為によって変化が生じ、このような変化はパートナーとパートナーとの間に成立する関係という観点での仮定、知識、信念のようなコミュニケーション状況の評価における変化が含まれるとされている。

1.2. サールにおける命題態度

先に示したようにサールは、発話行為論を主に扱った『言語行為 (Speech Acts)』においては特に命題態度について特化して取り上げてはいないが、『志向性 (Intentionality)』において発話行為論との関連もふまえて命題態度に言及している。サールは、周知のようにオースティンの言語行為論を継承し、言

語行為論の概念を精密化して哲学への応用を試みた。この『志向性』という著書は、『言語行為』からはじまる心と言語を扱った関連研究の3作目にあたり、前作に対しても基盤を与える目的で執筆されている。サールは、言語哲学を心の哲学の一部であるという前提に立って「発話と言語の完全な説明は、必ず、いかにして心もしくは脳が身体組織を實在に関連づけるかということに対する説明を要求する」¹⁴⁾と述べている。このような考え方に基づいてサールが命題態度をどのように扱っているか以下に関する記述をまとめてみることにする。

サールは、上記のヴァンダリッヒ同様に基本的には命題内容との関連で発話行為論の枠内で、命題態度について考察を始めている。サールは、志向性の分析は「大部分命題内容を内容とする状態、いわゆる命題的態度に関するものである。」¹⁵⁾とし、まずは命題内容と発話行為論の概念である発話内力 (illokutionäre Rolle) の区別が同様に当てはまると指摘する。これは発話内力を F、命題内容を p として F (p) で記述されることを表し、サールによる例示によれば、誰かある人がサリーをいう人を愛し、また雨が降っていることを信じていることを

愛する(サリー)

信ずる(雨が降っている)

と表記されるように、愛するや信じるの部分を命題態度と見なしていると考えられる。また同様なことは信念と願望を扱った箇所においても述べられている。その箇所では

私は君の家が欲しい

という例文の解釈をめぐる考察がなされる。サールは「「欲しい」が実際には命題的態度であることは、簡単な統辞論的議論がこれを示すであろう。」¹⁶⁾と述べ、「願」のあらゆる事例は命題的態度であると結論づけている。しかしながら「命題的態度の言明が発話者と命題との関係を記述しているという混乱した見解は無害な語り方ではない。それは、むしろ、de re (ものについての)志向的状

態と de dicto (語りについての) 心的状態との間に基本的な違いがあるという見解を生み出す一連の混乱の第一歩なのである。」¹⁷⁾ と述べられていることから、志向性との関連で単純に発話行為論における命題態度と同一にとらえているわけではないことが読み取れる。実際他の箇所において「命題的態度に適用された場合の de dicto / de rei の区別を正確にどう考えたらいいのかということについての明瞭適切な説明に、わたしは未だかつてお目にかかったためしがない。」¹⁸⁾ とか、「特定の対象に向けられた命題的態度とそうでないものとの間には、明らかに区別が認められる。」¹⁹⁾、あるいは「同一言明、存在言明、および命題的態度に関する言明中の、固有名にまつわる謎に対して、フレーゲの解釈を与えることができない…。」²⁰⁾ などと述べられているように、サールの関心は、単に命題と命題態度との関係にとどまらず、de rei / de dicto の問題や確定記述や指標語との関係をふまえて、志向性の問題に拡張されていることがわかる。しかし基本的な命題と命題態度との関係については、ヴンダリッヒのそれに対する扱いと共通しているように思われる。

以上のように発話行為論の枠内と、少々枠からは外れるが、関連を持った分野で命題態度がどのように扱われているかをまとめてきた。以下においては前回のテーマであった行為論の枠内で、特にデヴィットソンが命題態度についてどのように述べているかを調べてみることにしたい。

2. デヴィットソンにおける命題態度

本論文の「はじめに」においてデヴィットソンは、意味論と行為論の分野で主要な業績をあげていると書いたが、それぞれの分野におけるデヴィットソンの命題態度がどのようになされているのかを見てみたい。

2.1. 意味論における命題態度

デヴィットソンは意味論の枠内において、言語の意味理解と、信念・欲求・意図のような心的態度の帰属との分離不可能な連関を同時に与える解釈理論を展開しているといわれている。この分野の主要な著作である『真理と解釈 (In-

quiries into Truth and Interpretation)』においてある例文を引き合いに出して、「ここには、間接話法の正しい分析への鍵、一般に心理的な[事柄にかかわる]文(いわゆる命題的態度に関する文)の文の分析への見本となるような分析、並びに心理的な諸概念をその他の概念から分かつものへの手掛かりさえもある」²¹⁾と述べている。これからデヴィットソンは、命題的態度をラッセルの用いた命題的態度動詞あるいは心的動詞と従属文という関係で命題態度を捉えていることがわかる。しかしながら命題態度そのものに関わる記述はほとんどなされておらず、命題態度と関連した論理的、意味論的問題が中心として取り扱われている。特にフレーゲによる「意味」と「意義」や、真理関数的意味論あるいは間接話法中での指示の問題との関わりにおいて述べられている。デヴィットソンは、「フレーゲ以来、哲学者たちは、命題的態度に関する話における内容一文が、内包、命題、文、発話および文字表記というような存在者を奇妙にも指示してよい、という考えに慣れっこになっている。」²²⁾と述べられているように、フレーゲの命題態度との関わりで創られる間接的文脈に関する意味論への批判を展開している。

2.2. 行為論における命題態度

ここにおいてはデヴィットソンの『行為と出来事』の中で、行為や出来事との関係で命題態度がどのように扱われているかをまとめてみたい。

命題態度が中心的に扱われているのは、第8章の心的出来事においてである。ここでデヴィットソンは、知覚、想起、決定、行為といった心的出来事は物理学的法則によっては説明されていないとし、「心的出来事は他の出来事との因果的相互依存関係のうちにあるということ、そしてまた、心的出来事には非法則性があるということ、この二つは否定し得ない事実であるという仮定を私は採用する。」²³⁾と述べて考察を始めている。ある出来事が、心的である場合や物的であるというときに、純粹に物的な語によって記述可能である場合には物的で、心的用語によって記述可能である場合には心的であるとし、「意図している、欲している、希望している、知っている、見ている、気づいている、想起してい

る、等々、のような命題的態度を表現する動詞を、我々は心的と呼ぶかもしれない。そのような動詞は、人格を持った人間を指示する主語を持つ文に時折登場し、通常の置換規則が成立しないような見える埋蔵文と結合することによって述部を形成する、という事実によって特徴づけられる。』²⁴⁾ という記述からは、2.1 において見いだした、いわゆるラッセル以来の命題態度概念をデヴィットソンは想定していると考えられる。ただし「心的動詞の集合を適切に特徴づけるもう一つの方法は、非外延的であることが明白な文脈にある動詞が形成する場合にはその動詞は心理的動詞として使用されている。』²⁵⁾、あるいは「「M であるような出来事」という形の記述、あるいは「出来事 x は M である」という形の開放文(自由変更を含む文)において、「M」にあたる表現が心的動詞を少なくとも一つは本質的に含んでいるとき、そしてそのときにかぎって、それらの記述あるいは開放文を心的記述あるいは心的開放文と呼ぶことにしよう。』²⁶⁾ とあるように、命題態度を形成する心理的動詞の適用をより厳密に規定しようと試みていることがわかる。さらに心的動詞の適用ばかりではなく、厳密な理論を打ち立てることをも試みている。これに関しては、「ある人に対して何らかの命題的態度を有意味に帰属させることが可能であるとするならば、それは彼の信念や欲求や意図や決定に関する見込みのある理論の枠組みの中において初めて可能になる。』²⁷⁾、あるいは「ある人が文を口にした場合、彼がその文に対していかなる態度をとっているかということを明らかにすることができないかぎり、彼の発言の翻訳に着手することさえできないと思われるからである。』²⁸⁾ などと述べられており、心的なものを取り扱うためには物的なものに対するのとは違った理論が必要であることが指摘されている。

以上のように、ヴァンダリッヒ、サールそしてデヴィットソンが命題態度をどのように見なしているか、どのような点が独自ののかを概観してみた。命題態度を扱う際には、命題態度的動詞あるいは心的動詞と命題内容との関わりがとりわけ重要になる点は基本的な部分においては共通であるように思われるが、どのような取り扱いをするかということにはそれぞれ見解が異なっている。その中でも 1.2 で扱ったサールの「志向性」という概念は、「ある種の心的な状

態や出来事を、志向性を有していたり志向的であったりするものとして語る」²⁹⁾と述べていることから、心的状態の特殊なものとして扱っていることがわかる。最後に簡単にこのサールのいう志向性とはいかなるものであるのかをまとめてみたいと思う。

3. サールの志向性あるいは志向的状态

サールは、この志向性を「志向性とは世界内の対象や事態に向けられ、あるいはそれらに関わり、あるいはそれらについて生じているような、多くの心的な状態ないし出来事の特徴である。」³⁰⁾と規定している。しかしすべての心的状態が志向的であるわけではなく、対象が存在している場合にのみ志向的であるということができるところを指摘する。対象のない、漠然とした心的状態は志向的ではない。では志向的な諸状態あるいは対象や事態との間にある関係成立するとすれば、その関係とはいかなる関係であるのかが問われることになる。この関係の考察の中で発話行為と志向的状态の結びつきが探求される。発話行為が対象や事態を表す(表象する)のと同じように、志向的状态も対象や事態を表象するという類似性が見いだされる。さらに命題内容と発話内力との違いが志向的状态にも適合するとされる。この点に関しては 1.2 でも扱っているので詳しくふれることはさけるが、志向的状态と命題態度との類似性を考えることができるように思われる。発話行為論との関係においては、命令、指揮、要求などのサールのいう指令型(directive)と約束、保証、誓約などの行為拘束型(commisive)な発話行為に関する適合方向についても考察がなされている。適合方向というのは「心あるいは言葉の、世界に対する」と「世界の、心あるいは言葉に対する」適合方向のことで、たとえば信念のようなものは心を世界にあわせることであるが、願望などは世界を心にあわせるというような適応方向を持つと述べられている。さらには誠実性条件や充足条件というサールが発話行為論の中で展開している理論とも類似点があることが詳述されているが、中でも充足条件が適合方向を持ったあらゆる志向的状态の表れであり、志向性解明の鍵となるとされる。この充足条件は、ある発話が行われた場合、その発

話が発話内行為で定められた適合方向の中で成功したか、不成功に終わったかということの問題とする成功条件でもであるとされている。サールは「決定的に重要なのは、適合方向を有するすべての発話行為について、発話行為が充足されるのは表明された心的状態が充足し、かつ発話行為の充足条件と表明された心的状態とが同一である時に限られる、ということを見てとることである。」³¹⁾と述べている。このような発話行為論との関係において志向的状态は、ある種の心理状態における表象内容から成り立ち、発話行為が対象や事態を表象するのと同じ意味で、しかし異なった仕組みや仕方で、対象や事態を表象すると規定される。さらに信念を例として「信念とはある種の心理状態における命題内容のことであって、その状態が心の、世界に対する適合方向を決定し、その命題内容が一群の充足条件を決定する。」³²⁾ というように、ここでも志向的状态が命題態度と命題内容との関係に類似した関係を持っていることが示されているように思われる。

サールは、志向性の解明を試みる過程で、いくつかの問題点も指摘し、説明が試みられている。特に指示対象、意図と行為、因果関係、意味、バックグラウンド、間接文の内包性と外包性の問題などが詳しく考察されている。

このようなサールの志向性に関しては、今回のテーマである命題態度と深い関わりがあり、また命題態度の持つ問題点も同様に有していることが見てとれる。

4. 発話行為論、行為論への応用と課題

以上命題態度をキーワードとして、発話行為論、行為論さらに志向性というそれぞれの枠内で、命題態度がどのように扱われているのかをごく簡単に調べてきたわけであるが、どの枠内においても共通して言えるであろうことは、

- 命題内容を従属節として伴った心的動詞あるいは志向的動詞で表される態度ということになる。この点に関していえば、ラッセルの規定で考えられるとも言える。また命題態度として指摘される問題点も同様に共通していると思われる。特に心的動詞と命題内容との関係と、心的動詞の扱い、命題内容内

の指示関係などはフレーゲ以来依然として解決されずに残されたままになっている。これらの問題点に独自の観点で解決を試みている一つの例がサールであろう。志向性に関する彼の考察は、今後の方針の一つとして再度取り組まなければならないものと思われる。中でも上記した問題点の中でバックグラウンドとしてサールが取り上げているものは、今回は詳しくは述べられなかったが、いわゆる前提や状況の關係に独自の考えを取り入れたものである。発話行為論、行為論においても、その発話や行為がなされるためのある種の条件として今後の課題としてみたいと思う。

注

- 1) D. デヴィットソン(服部裕幸他訳)『行為と出来事』勁草書房 1990
- 2) Bertrand Arthur William Russel. イギリスを代表する哲学者、論理学者
- 3) 事象的 / 言表的ある特定の事象・ものについてとそれがある性質を持ちうるかという場合の区別として、前者を事象的、後者を言表的とする。
- 4) John Langshaw Austin. イギリスの哲学者。言語の儀式的使用や行為的使用を発見。
- 5) J. L. オースティン(坂本百大訳)『言語と行為』大修館書店 1978
- 6) John Seale. アメリカの哲学者。言語行為の分類、間接的言語行為、比喩などについての言語哲学的研究で有名。
- 7) J. R. サール(坂本・土屋訳)『言語行為』勁草書房 1986
- 8) J. R. サール(坂本百大監訳)『志向性』勁草書房 1986
- 9) Wunderlich, Dieter 1976: Studien zur Sprechakttheorie. Frankfurt: Suhrkamp.
- 10) Wunderlich, Dieter 1980: Aspekte einer Theorie der Sprechhandlungen. In Handlungstheorien — interdisziplinäre Band 1. München: Wilhelm Fink Verlag.
- 11) „Aspekte einer Theorie der Sprechhandlungen“ S. 389
- 12) 同上 S. 396
- 13) 同上 S. 382
- 14) 『志向性』序 ii
- 15) 同上 9 ページ
- 16) 同上 39 ページ
- 17) 同上 278 ページ
- 18) 同上 291 ページ
- 19) 同上 293 ページ
- 20) 同上 278 ページ
- 21) 『真理と解釈』74 ページ
- 22) 同上 95 ページ
- 23) 『行為と出来事』262 ページ
- 24) 同上 267 ページ
- 25) 同上 268 ページ
- 26) 同上 268 ページ

- 27) 同上 285 ページ
- 28) 同上 286 ページ
- 29) 『志向性』5 ページ
- 30) 同上 1 ページ
- 31) 同上 14 ページ
- 32) 同上 19 ページ

参考文献

- D. デヴィットソン(服部裕幸他訳)『行為と出来事』勁草書房 1990
- D. デヴィットソン(野本和幸他訳)『真理と解釈』勁草書房 1991
- J. L. オースティン(坂本百大訳)『言語と行為』大修館書店 1978
- J. R. サール(坂本・土屋訳)『言語行為』勁草書房 1986
- J. R. サール(坂本百大監訳)『志向性』勁草書房 1986
- S. エヴニン(宮島昭二訳)『デイヴィットソン』誠信書房 1997
- 森本浩一『デイヴィッドソン』NHK出版 2004
- Davidson, Donald 1980: Actions & Events. Oxford: Clarendon Press.
- Hindelang, Gätz 1994: Einführung in die Sprechakttheorie. Tübingen: Max Niemeyer Verlag.
- Searle, John R 1991: Intentionalität. Frankfurt am Main: Suhrkamp.
- Searle, John R 1992: Sprechakte. Frankfurt am Main: Suhrkamp.
- Wunderlich, Dieter 1976: Studien zur Sprechakttheorie. Frankfurt: Suhrkamp.
- Wunderlich, Dieter 1980: Aspekte einer Theorie der Sprechhandlungen. In Handlungstheorien — interdisziplinäre Band 1. München: Wilhelm Fink Verlag.

Über die propositionale Einstellung

Mitsuru KANAI

In einem früheren Aufsatz, der in Dokkyo Universität Germanistische Forschungsbeiträge Nr. 39 abgedruckt wurde, habe ich die Handlung mit Beziehung auf die Sprechakttheorie untersucht. Dabei wurde die propositionale Einstellung als Schlüsselwort erkannt.

In diesem Aufsatz wird daher die propositionale Einstellung näher erläutert. Der Begriff „propositionale Einstellung“ wurde von dem englischen Philosophen und Logiker Russel aufgestellt. Es handelt sich dabei um Verben, die psychische Zustände ausdrücken, wie „glauben“, „wissen“ und „wünschen“, und die damit verbundenen Nebensätze. Diese Nebensätze wurden „propositionaler Gehalt“ genannt.

Zuerst versuche ich zu erläutern, wie die propositionale Einstellung im Rahmen der Sprechakttheorie und der Handlungstheorie benutzt ist. J. L. Austin, der die Sprechakttheorie aufgestellt hat, erwähnt in seinem Hauptwerk „How to Do Things with Words“ die propositionale Einstellung nicht direkt. John Searle, der Nachfolger von Austin, detailriert auch nicht die propositionale Einstellung in seinem berühmten Werk „Speechact“. Aber er behandelt sie in seinem Werk „Intentionality“ noch näher. Ich erwähne es allein im dritten Kapitel. In Rahmen der Sprechakttheorie beziehe ich mich deshalb auf Wunderlich in seinen „Studien zur Sprechakttheorie“ und „Aspekte einer Theorie der Sprechhandlungen“. Wunderlich behauptet in seinem Aufsatz „Aspekte einer Theorie der Sprechhandlungen“, dass die propositionalen Einstellungen von Sprechern bei der Untersuchung der Sprechhandlungen eine große Rolle spielen und auch jede Sprechhandlung eine Änderung zwischen Sprecher, Angesprochenen und der bestehenden sozialen Situation bewirkt. Aber es scheint mir, dass Wunderlich die propositionale Einstellung nach der von Russel

bestimmten Definition verwendet.

Im zweiten Kapitel habe ich mich im Rahmen der Handlungstheorie und Semantik auf Davidson bezogen. Davidson behandelt die propositionale Einstellung in seinem Werk „Inquiries into Truth and Interpretation“ und „Essays on Actions and Events“ hauptsächlich in bezug auf Frege, und weist dabei einige Probleme der propositionalen Einstellung auf. Aber es scheint mir, kein großer Unterschied zwischen Russell und Davidson bei der Verwendung der propositionalen Einstellung zu bestehen.

Der Begriff oder die Definition „propositionale Einstellung“ scheint mir noch problematisch zu sein. Für die weitere Untersuchung könnte „Intentionalität“ von Searle verwendet werden.